

問題意識をもって、自己の生き方を考える道徳科学習指導

～ねらいとする価値に向かう学習過程と発問の工夫を通して～

所属機関 遠賀郡教育研究所
所属校 岡垣町立吉木小学校
職・氏名 教諭・木村 有紀子

1 主題設定の理由

道徳科には、決まった正解は存在しない。子どもの発達段階に応じ、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の子どもが自分の問題として捉え、「問題」に対して「あなたならどうするか」を真正面から問い、自分自身のこととして考えることが求められている。また、子どもの能動的な学びを道徳科で体現させるためにも、「自分のこと」として考えさせることは、大変意義深いと考える。

2 主題の意味

(1) 「問題意識をもつ」とは

本研究では、道徳的価値に根差した問題について、自分のこととして考えることを「問題意識をもつ」と定義する。

(2) 「自己の生き方を考える」とは

本研究では、ねらいとする道徳的価値について、これまでの自分の生活を振り返り、これからの自分の生活について考えることを、「自己の生き方を考える」と定義する。

3 研究の目標

道徳科の学習指導において、問題意識をもって、自己の生き方を考える子どもを育成するために、ねらいとする価値に向かうための学習過程と発問を究明する。

4 研究の仮説

道徳科の学習指導において、以下のような手立てを工夫すれば、問題意識をもって、自己の生き方を考える子どもが育つであろう。

- ・ 問題意識をもたせるための導入場面の工夫
- ・ ねらいとする価値に迫るための発問の工夫
- ・ 振り返りの視点を与え、自分の生活について振り返ることができる工夫

5 研究の構想

(1) 問題意識をもたせるための導入場面の工夫

遠賀郡教育研究所小学校道徳部会では、価値への方向付けを行うために、導入場面の発問の型を4つに分類している。内容項目に関わる発問を行う「テーマ発問型」、教材に関わる発問を行う「教材発問型」、課題を提示し問題を掴ませる発問を行う「問題解決的学習型」、子どもの経験・体験を想起させる中で自分事として考えさせる「自由想起型」である。

本研究では、ねらいとする価値について直球に問うことができる「テーマ発問型」と子どもが自分の生活と関連付けて考えることができる「自由想起型」に着目し、子どもが「ねらいとする価値について問題意識をもつ」ことができるようにする。

(2) ねらいとする価値に迫るための発問の工夫

中心発問は、授業のねらいに深く関わる発問ではあるが、子どもたちは、物事を多面的・多角的に考えているため、様々な道徳的価値が出される。全体交流の後に、ねらいとする価値に迫るための発問をすることで、ねらいとする価値への転化を図ったり、ねらいとする価値のよさに気付かせたりする。

(3) 振り返りの視点を与え、自分の生活について振り返ることができる工夫

子どもが道徳的価値の理解について、自分の関わりで深めたり、自分自身の体験やそれに伴う考え方や感じ方などを想起したりすることができるようにするために、振り返りの3つの視点(①「今日の学習で分かったことは何か」②「これまでの自分はどうだったか」③「これからの自分はどのようにしていきたいか」)を与える。

6 研究の実際 [対象：岡垣町立吉木小学校 第6学年2組(22名)]

(1) 授業実践1

ア 教材の概要と発問計画

主題名：「誠実に生きる」A—(2)〔正直、誠実〕	教材名：「手品師」(出典 日本文教出版) 生きる力
【ねらい】 大劇場のステージに立てるチャンスを断り、男の子との約束を守った手品師の生き方に触れ、「誠実」という言葉について考えることを通して、相手だけでなく、自分にも誠実であることのよさに気付かせ、自分が納得できる行いをしようとする心情を育てる。	
【発問計画】	
<input type="checkbox"/> 導入	《テーマ発問》 ・「誠実」とは、どのようなことでしょうか。
<input type="checkbox"/> 展開前段①	《中心発問》 ・男の子との約束を選んだ手品師が大切にしたい思いは何でしょうか。
<input type="checkbox"/> 展開前段②	《ねらいとする価値に迫る発問》 ・男の子との約束を守ったのは、誰のためでしょうか。
<input type="checkbox"/> 展開後段	《ねらいとする価値について考える発問》 ・「誠実な生き方」とは、どんな生き方なのでしょうか。
<input type="checkbox"/> 終末	《自己の生き方について考える3つの視点》

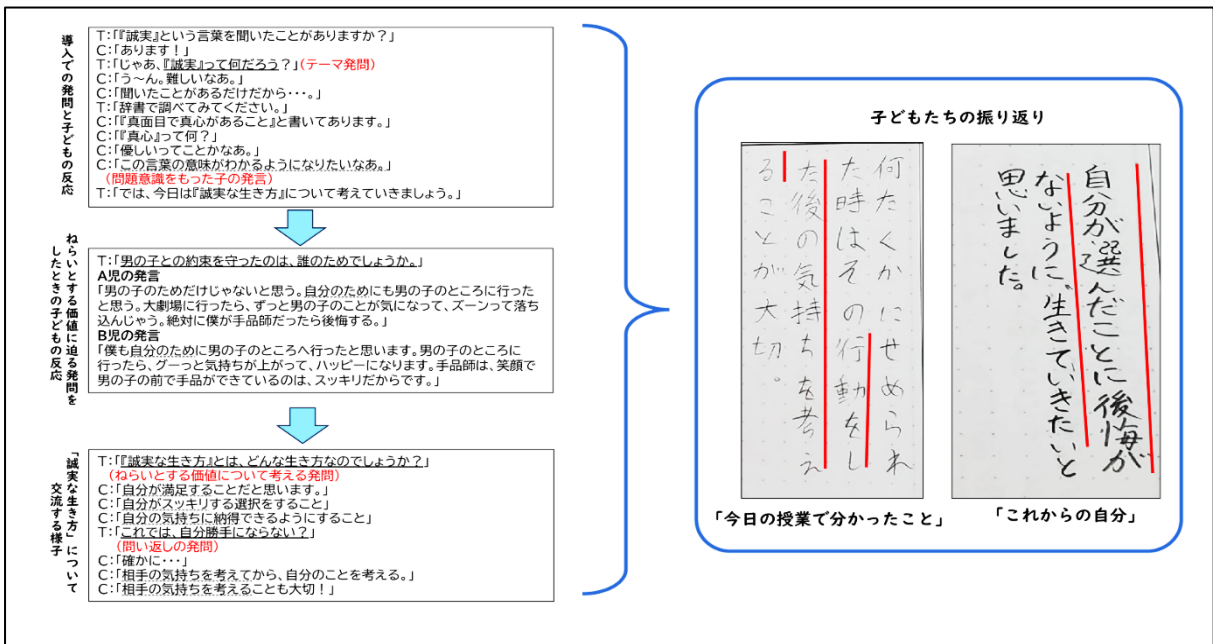


図1 研究の構想に沿った授業展開と子どもたちの振り返りの記述内容

イ 考察（図1参照）

（ア）問題意識をもたせるための導入場面の工夫

導入において、テーマ型発問をしたことは、子どもが「誠実」という言葉をあまり知らなかったからこそ、子どもたちに疑問を抱かせることができ、問題意識を持たせるためには、有効であった。また、子どもにとって本時学習の目的が明確になった。

（イ）ねらいとする価値に迫るための発問の工夫

展開前段①における中心発問は、ねらいとする価値に迫るためには、有効であった。そして、展開前段②で、「ねらいとする価値に迫る発問」をしたことで、子どもたちは、「責任感」や「思いやり」の内容項目に流されることなく、「誠実な生き方」について考えることができていた。しかし、子どもの考えを生かして、ねらいとする価値に迫ることができなかった。

（ウ）振り返りの視点を与え、自分の生活について振り返ることができる工夫

子どもたちは何を書けばよいか明瞭になり、3つの視点に沿って記述することができていた。しかし、「これまでの自分」について記述できた子がいなかった。これは、「誠実な生き方」という価値そのものが子どもたちにとって高かったことも考えられるが、「誠実」について考えるという問題意識が先行してしまい、これまでの自己の生き方について振り返ることまでつながっていなかったのではないかと考えられる。

（2）授業実践2

ア 教材の概要と発問計画

主題名：「広く受け入れる心」B—（11）〔相互理解、寛容〕

教材名：「ブランコ乗りとピエロ」（出典 日本文教出版）生きる力

【ねらい】

サムを憎む気持ちが消えた理由を考えることを通して、意見や考えの違う相手の気持ちや考えを尊重することで、より良いものが生まれるといった良さに気づき、自分と異なる考えや意見を尊重し、大切にしていこうとする態度を養う。

【発問計画】

- 導入 《自由想起発問》
 - ・友達と考えや意見が合わなかったことはありますか。
- 展開前段① 《中心発問》
 - ・なぜ、ピエロから憎む気持ちが消えたのでしょうか。
- 展開前段② 《ねらいとする価値に迫る発問》
 - ・初日の大成功と最終日の大成功は同じでしょうか。
- 展開後段 《ねらいとする価値について考える発問》
 - ・友達と考えが違うとき、どんな心を大切にしたいですか。《自分の生活を振り返るための発問》
 - ・これまでの自分と比べて、こんな時、どうすればよさそうですか。
- 終末 《自己の生き方について考える3つの視点》

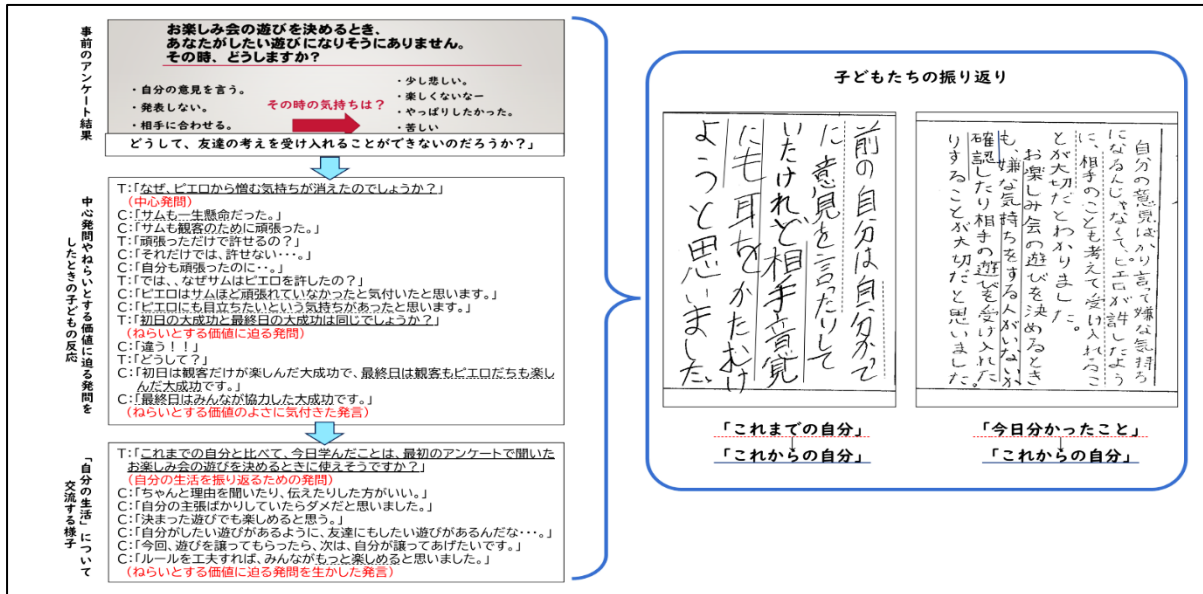


図2 研究の構想に沿った授業展開と子どもたちの振り返りの記述内容

イ 考察 (図2 参照)

(ア) 問題意識をもたせるための導入場面の工夫

導入において、事前アンケートをもとに、子どもたちの生活経験から問題を見出すことは、子どもたちが問題意識をもちやすく、有効であった。また、「問題」に対して「どうしてそのようになってしまうのか。」を加えて発問することで、子どもたちが「よりよい生活をしていくためにこの問題を解決していきたい。」と考えるきっかけとなり、本時の中で子どもたちが考えることが明確になった。

(イ) ねらいとする価値に迫るための発問の工夫

子どもたちの発言に対して、問い返しを発問を行うことで、子どもたちの考えを生かしながら、「ねらいとする価値に迫る発問」につなげることができた。また、「ねらいとする価値に迫る発問」をすることで、その価値のよさにも気付かせることができた。

(ウ) 振り返りの視点を与え、自分の生活について振り返ることができる工夫

展開後段で、導入場面のアンケートに立ち返り、「自分の生活を振り返るための発問」を挿入したことは、「これまでの自分」と「これからの自分」をつなげるために、有効であった。しかし、3つの視点すべてについて、子どもたちが振り返ることができるようにするためには、十分な時間の確保が必要である。

7 成果と課題

- 「テーマ発問型」や「自由想起型」を取り入れた導入は、子どもたちに問題意識をもたせ、本時で考える問題を明確にするための手立てとして有効であった。
- 中心発問で交流した後に「ねらいとする価値に迫る発問」をすることで、本時のねらいとする価値の転化を図ったり、その価値のよさに気付いたりすることができた。
- 振り返りの3つの視点を与えることは、子どもたちが授業の学びを使って、自分の生き方を考える手立てとして有効であった。
- 本研究では、終末場面の時間が十分に確保できなかった。子どもたちが問題意識をもって自己の生き方を十分に考えることができる学習過程について工夫をしていく必要がある。
- 今後は、「教材発問型」と「問題解決的学習型」でも問題意識をもって、自己の生き方を考える子どもを育むことができるか、検証していく必要がある。